

卒業研究の教育的効果 —その軌跡を学生の意欲から分析して—

Effects of the graduation reports: Analyses of motive of under graduates

伊藤 恵美子

Emiko Ito

愛知東邦大学経営学部

要 旨

豊かな読書習慣のない学生たちが書店で新書を選ぶことからスタートした卒業研究が、長期休暇中の補習・グループ別指導を経て、どのように進んだか、研究の達成とともにどのような効果をもたらされたかを、専門演習の内容、意欲・非認知能力のアンケート、1年間の研究過程を記した「卒業研究ノート」から分析を行った。補習と1年半の演習指導の結果、4年前期終了時点でGPA1.0未満の学生は皆無となり、ほとんどの学生のGPAが過去の値より上昇した。アンケート分析から、学生の欲求・動機レベルの意欲は高いが学習行動レベルと認知・感情レベルは低く、これは自制心・やり抜く力・満足の先延ばしに代表される非認知能力と関係があることが分かった。「卒業研究ノート」の分析からは、進捗状況をノートでモニターして卒業研究を完成した軌跡が読み取れ、マズローの自尊心の欲求の充足から自己実現に向かう姿勢が認められた。

1. はじめに

2021年10月から11月にかけて全国大学生生活協同組合連合会が全国の学部学生約11,000人を対象に実施した学生生活実態調査によると、1日の読書時間0分と答えた学生が50.5%、前年比3.3ポイント増加している（全国大学生生活協同組合連合会，2022）。この潮流に歩調を合わせるように、専門演習コース当初の個人面談で2019年度入学生の数人が教科書以外の本を読んだことがないと口にした。学生の自己申告なので、敢えて読書経験について触れなかった学生がいたことは想像に難くない⁽¹⁾。

本学経営学部では、シラバスに卒業論文と銘打った科目はない。言い換えれば、論文提出が卒業に必要な要件に位置付けられているわけでもなければ、必修単位として求められているわけでもない。他方、大学4年間の学びの成果として、4年次の専門演習で自主研究を学生に促す方針が出されている。テーマは特に指定されておらず、字数は15,000字以上なので、共通認識としては論文というよりレポート相当になろう。とは言え、大学生として学術的なレポートを書くなら、自らの主張と、その主張を支える根拠を客観的なスタイルで文章表現する必要がある。その為には、文献を検索して、収集して、批判的に読んで、自らの主張を展開するという一連の営みを主体的に続けなければ

ならないが、読書経験の乏しい学生にとっては至難の業である。

上述の学部方針に従い、筆者は学生が卒業研究を完成することをゴールに据えて3年次から4年次にかけての2年間を一括して演習授業をデザインし、指導を行うことにした。本稿では専門演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳのねらいと進め方、3年次から4年次にかけての春期休暇に行った日本語補習・グループ別指導を概観した後、これらの指導を通して卒業研究を完成していく過程で学生が変容していった軌跡を、最終授業日に行った意欲・非認知能力のアンケート、及び1年間の研究過程を記した「卒業研究ノート」を用いて考察していく。

2. 研究の背景と本稿の立脚点

2-1. 自ら学ぶ意欲

本稿の先行研究における重要な概念として、動機づけの観点から自ら学ぶ意欲 (voluntary motive for learning) を挙げる。動機は内発的動機 (intrinsic motive) と外発的動機 (extrinsic motive) に大別され、前者は「好きだから学ぶ」「おもしろいから学ぶ」のように人の内面から湧いてくる動機で、後者は「良い評価を得たいから学ぶ」「金持ちになるために学ぶ」のように学ぶこと以外が目的になる動機である。この内発的動機に、外発的動機に含まれる自己実現への動機を融合した概念が自ら学ぶ意欲である (櫻井, 2009)。

自己実現は、マズロー (Maslow A.) の5段階説、基本的欲求である (1) 生理的欲求から、(2) 安全と安定欲求、(3) 愛・集団所属欲求、(4) 自尊心・他者による尊敬欲求、(5) 自己実現欲求へと発達するモデルにおいてヒエラルキーの頂上に位置付けられ、低次の欲求が充足されるにつれて向かうレベルとされている (ゴープル, 1972 : 83)。(1)生理的欲求が生きるための最低限必要な欲求であるのに対して、人間が成長を求めようとする傾向から(5)自己実現欲求は人生の最終目標とされている。

2-2. 非認知能力

文部科学省では生きる力、心理学では社会情動的スキルと称する心理的特性を (中山, 2018 : 18-19)、心理学を取り入れた行動経済学が脚光を浴びる昨今、経済学の分野では非認知能力 (noncognitive abilities) と呼ぶ。シカゴ大学の計量経済学者ヘックマン (Heckman, J.) の提唱を受け⁽²⁾、2010年代以降、非認知能力が世界中で注目されるようになった。認知能力がIQ (Intelligence Quotient) や学力テストで測られるのに対して、非認知能力は数値化されにくく、意欲、長期的計画を実行する力、他者との協同のために感情をコントロールして我慢や持続する力が一例として挙げられる。ヘックマンは人生における成功は賢さ以上の要素に左右されると考え⁽³⁾、知能や学力よりも非認知能力の重要性を主張している (小塩, 2021)。

ジャーナリストのタフ (Tough, P.) は、子どもの発達に重視すべきは、情報を脳に詰め込むことではなく、粘り強さ、自制心、好奇心、誠実さ、自信、やり抜く力、喜びや楽しみを先送りにできる力、計画に沿ってやり遂げる力を伸ばすことだと言う (タフ, 2013 : 16, 21)。また、自制心とやり抜く力の権威であるペンシルベニア大学の心理学者ダックワース (Duckworth, A.) の調査から、人生を成功へと導く道、つまり大学の教育課程を修了できるかどうかは、モチベーション、粘り強さ、よい学習習慣、時間管理能力の有無が大きな判断材料になると結論付けている (タフ, 2013 : 231)。

2-3. メタ認知

メタ認知 (metacognitive) とは「思考について考える」ことで、認知の知と認知の規則の要素に分けられる。前者は宣言的、手続き的、後者は計画、モニタリング、制御、振り返りと説明される (OECD教育研究革新センター, 2015:47)。メタ認知的知識は年齢とともに発達し、状況に応じて計画が立てられるようになるとされている。したがって、メタ認知を活用している学習者は学習の進み具合をモニターして目標が達成するように考え、その成果を振り返ることができる。メタ認知に着目した指導は数学に限らず (OECD教育研究革新センター, 2015)、国語 (渡邊, 2012)、英語 (笠井・長友, 2018)、日本語の現場 (藤田・福島・白頭, 2022) で盛んに行われている。また、個に即した文章表現指導では読み手である自分を自己内他者と位置づけ、メタ的な役割を担っているとしている (吉田, 2012)。

3. 専門演習 I・II・III・IV

3-1. 3年次専門演習 I・IIのねらいと進め方

3年次専門演習では4年次に学外の資料活用が必至になることを想定し資料収集に慣れさせることに主眼を置き⁽⁴⁾、個々人で愛知県図書館・名古屋市立図書館等の公共図書館に出かけ、興味が持てそうな本、おもしろそうな本、既存の知識で読めそうな本を1冊選んで借りるという段階から、演習授業「ビブリオバトル」をスタートした。

「ビブリオバトル」は前期・後期で各2回実施し、1年間で4冊の本を読むことを目標とした。これは、一般的に他大学で行われているような3年次から卒業論文作成の一環で先行研究を読ませる指導に比べて、遠回りの指導のように思われる向きもあろうが、読書経験の少ない、もしくは皆無に等しい学生にとっては活字資料に親しむ機会から始める必要があると考えたからである。

前期・後期の授業で学生が紹介した本を、それぞれ表1・表2に掲げる。

表1 ビブリオバトルの本【前期】

氏名	タイトル
A	長谷部誠 (2021) 『心を整える：勝利をたくり寄せるための56の習慣』 幻冬舎 1冊不明 ⁽⁵⁾
B	谷隆一・藤江亮介 (2019) 『スポーツで働く』 ぺりかん社 中山和義 (2008) 『スポーツから気づく大切なこと。』 実業之日本社
C	日向夏 (2012) 『薬屋のひとりごと』 主婦の友社 五十嵐律人 (2020) 『法廷遊戯』 講談社
D	金哲彦 (2020) 『新型コロナ時代のランニング』 KADOKAWA 下光輝一・八田秀雄 (2018) 『運動と疲労の科学：疲労と理解する新たな視点』 大修館書店
E	安田剛士 (2013) 『DAYS』 講談社 佐藤俊 (2002) 『中村俊輔リスタート』 文藝春秋
F	森川貞夫 (2013) 『日本のスポーツ界は暴力を克服できるか』 かもがわ出版 野村克也 (2005) 『野村ノート』 小学館
G	神仁司 (2018) 『錦織圭15-0』 実業之日本社 河野昭典 (2015) 『メンタルによる運動障害「イップス」かもしれないと思ったら、まず読む本：心のしくみを知って克服し、さらに大きく飛躍できる！』 BABジャパン
H	あさのあつこ (2003) 『バッテリー』 KADOKAWA 百田尚樹 (2009) 『永遠の0』 講談社
I	篠宮慎一 (2009) 『誰も知らないプロ野球「審判」というお仕事』 祥伝社 1冊不明
J	伊藤丈恭 (2019) 『人前で変に緊張しなくなるすごい方法』 アスコム 菅原道仁 (2016) 『そのお金のムダづかい、やめられます』 文響社

表2 ビブリオバトルの本【後期】

氏名	タイトル
A	心屋仁之助 (2018) 『強がらない。』 KADOKAWA 有馬哲夫 (2011) 『ディズニーランドの秘密』 新潮社
B	デューク石川 (2004) 『ゴルフの経済学』 日本放送出版協会 橋下徹 (2021) 『決断力：誰もが納得する結論の導き方』 PHP研究所
C	枅野俊明 (2021) 『仕事も人間関係もうまくいく放っておく力』 三笠書房 田中研之輔 (2018) 『先生は教えてくれない就活のトリセツ』 筑摩書房
D	鴻上尚史 (2019) 『「空気」を読んでも従わない：生き苦しさからラクになる』 岩波書店 ひろゆき (2018) 『論破力』 朝日新聞出版
E	指南役 (2017) 『「朝ドラ」：一人勝ちの法則』 光文社 中山秀紀 (2020) 『スマホ依存から脳を守る』 朝日新聞出版
F	山口慎太郎 (2019) 『「家族の幸せ」の経済学：データ分析でわかった結婚、出産、子育ての真実』 光文社 桑島浩彰・川端由美 (2021) 『日本車は生き残れるか』 講談社
G	曾野綾子 (2016) 『日本人の甘え』 新潮社 石川結貴 (2021) 『スマホ危機親子の克服術』 文藝春秋
H	伊集院静 (2015) 『無頼のススメ』 新潮社 井出留美 (2020) 『食料危機：パンデミック、バツタ、食品ロス』 PHP研究所
I	久世芽亜里 (2020) 『コンビニは通える引きこもりたち』 新潮社 氏原英明 (2021) 『甲子園は通過点です：勝利至上主義と決別した男たち』 新潮社
J	和田秀樹 (2013) 『「依存症」社会』 祥伝社 百田尚樹 (2018) 『逃げる力』 PHP研究所

日常的に読書に親しんでいる学生は、前期・後期を通して選んだ本に大きな違いは見られない。ところが、教科書以外の本を読んだことがない学生は、漫画本・スポーツ関連の本・映画を見て予め筋を知っている本を選ぶ傾向が顕著である。つまり、抽象化された記号（文字）から情報を抽出することに苦手意識が働き、具体的事象を了解している本を選んでいると見られる。「ビブリオバトル」のルールでは本のジャンルに制限はないので絵本でも写真集でも構わないが（伊藤，2017）、4年次の卒業研究を視野に入れたら、客観的な情報を抽出できる論説文に慣れる必要があるので、後期は本の選定を新書に限定した。

3-2. 日本語補習から卒業研究指導へ

卒業研究のテーマ探しと論説文の要約練習を兼ねて、3年生から4年生にかけての春期休暇に新聞の社説要約を課した⁽⁶⁾。教室で全国紙5紙と地方紙（中日新聞）1紙の社説を見せて説明したにもかかわらず、コラム（中日春秋）を要約してきた学生や、縦書きの社説をノートにそのまま横書きに書き写してきた学生がいた。新聞を読む習慣がないうえに聞く力が不十分で指示が理解できない学生や読解力不足で論点が不明で要約ができない学生たちにとって、卒業研究はハードルが高すぎて、コピー&ペーストのレポートが提出される恐れがあったので、根本的な対処を迫られた。

本学では1年生向けに中等教育から高等教育への橋渡しとして現代日本語の文法・語彙・表現をおさらいする日本語表現Ⅰ・Ⅱ、2年生対象に大学生に必要な文章表現能力を養成するアカデミック・ライティングの科目が開講されている。いずれも選択科目なので全学生が履修するわけではないが、履修が必要な学生が履修しないという現実がある。

演習学生のうち、GPA（Grade Point Average）が平均値を大きく上回る学生たちは両科目を履修済みであり、基本的なライティングに問題はなかった。しかし、GPAが平均以下で、紹介したい本が読破できず「ビブリオバトル」でプレゼンテーションできなかつたり期末レポートで非文を生成したりする学生たちは、3年次後期時点で両科目を

履修していなかった。そこで、春期休暇に全員に課した社説の要約に加えて、日本語表現Ⅰ・Ⅱの未履修者に対して日本語文法の重要な箇所を補習授業として行った。また、4年次前期履修科目としてアカデミック・ライティングを受講、もしくは聴講することも勧めた。

社説の要約指導も日本語補習授業も研究室での密を避けるためにグループ別としたが、欠席した学生には後日個人指導を行った。春期休暇の日本語補習のメンバーになぜ入っているのかが理解できた学生は出席したが、自覚できなかった学生は補習だけでなくグループ別指導も欠席した。しかし、前期授業を終えるころには研究の進捗状況から自ずと立ち位置が見えてきたようで、夏季休暇はグループ別指導に欠席する者はいなくなった。

【3年次後期授業後～春期休暇】

2022年1月18日3限	個人指導
2022年1月24日3限	グループ別指導
2022年1月25日3～4限	グループ別指導、日本語補習
2022年1月26日3限	グループ別指導
2022年2月25日3～4限	日本語補習×2
2022年3月9日3～4限	個人指導×2
2022年3月17日4限	個人指導

合計7日(90分×10回)

【4年次前期授業後～夏期休暇】

2022年8月10日3～4限	グループ別指導×2
2022年8月11日3限	グループ別指導

合計2日(90分×3回)

3-3. 4年次専門演習Ⅲ・Ⅳのねらいと進め方

4年次専門演習のねらいは、卒業研究を通して情報の収集と分析、論理的思考、文章作成、及びプレゼンテーション能力の養成である。学生は、3年次専門演習で広がった視野と向上した読解能力、並びに春季休暇に収集した資料を基に「卒業研究ノート」を用いて卒業研究を進めていく。資料の読み込みにより研究が進む過程を「卒業研究ノート」に記述して、メタ認知を活用して思考の足跡を振り返りながら進められるように授業設計した。

授業期間中の教室での対面授業のみならず、春期休暇には要約練習と日本語補習授業をグループ別学習と個人指導、夏季休暇もグループ別学習を継続した。後期授業初日に夏季休暇中に書いた第一草稿を提出、第一草稿をピア・ラーニングで修正した後に第二草稿を提出、これと並行して個別指導を行って最終稿の提出とした。

2022年度専門演習Ⅲ【前期】・Ⅳ【後期】の授業内容、個人研究に関する申し合わせ、及び研究テーマは、次のとおりである。

専門演習Ⅲ【前期】

- 第1回 授業の進め方、春季休暇の報告、個人面談（1）
- 第2回 4年次学修と学生生活の計画、個人面談（2）
- 第3回 Aグループの発表（1）
- 第4回 Bグループの発表（1）
- 第5回 Cグループの発表（1）
- 第6回 小まとめ
- 第7回 Aグループの発表（2）
- 第8回 Bグループの発表（2）
- 第9回 Cグループの発表（2）
- 第10回 小まとめ
- 第11回 Aグループの発表（3）
- 第12回 Bグループの発表（3）
- 第13回 Cグループの発表（3）
- 第14回 小まとめ
- 第15回 全体のまとめ

専門演習Ⅳ【後期】

- 第1回 第一草稿の提出、後期授業の説明、個人面談（1）
- 第2回 後期の学修と学生生活の計画、個人面談（2）
- 第3回 グループ別ピア・ラーニング⁽⁷⁾（1）⇒訂正（様式・書き言葉・引用・文献）
- 第4回 グループ別ピア・ラーニング（2）⇒訂正（様式・書き言葉・引用・文献）
- 第5回 個別指導（1）
- 第6回 資料の再収集
- 第7回 第二草稿の提出
- 第8回 グループ別ピア・ラーニング（1）⇒推敲（論旨・全体の見直し）
- 第9回 グループ別ピア・ラーニング（2）⇒推敲（論旨・全体の見直し）
- 第10回 個別指導（2）
- 第11回 最終稿の提出
- 第12回 専門演習発表大会の準備（スライド作成）
- 第13回 専門演習発表大会の準備（リハーサル⇒代表の選出）
- 第14回 専門演習発表大会の準備（収録）
- 第15回 まとめ

【個人研究に関する申し合わせ】

- ・テーマは興味や関心に沿ったもので良いが、社会的な課題であること
- ・大学4年間の学びや経験を踏まえて、根拠（データ）を基に自己の主張を記すこと
- ・参考文献（本・資料）5冊以上
- ・原稿はA4用紙縦置きで、横書き、明朝体、10.5ポイント、40字×30行、15枚以上
- ・原稿はパソコンに入力し、紙媒体と電子データを提出すること
- ・研究の進捗状況を「卒業研究ノート」に明記すること
- ・原稿は、文献を読み解き、調査を行い、章構成を整えて、考察を論理的に記述すること
- ・引用箇所と自己の意見を明確に区別すること
- ・結論は資料の著者の考えを写し取るのではなく、自己の意見を独創的に展開すること
- ・文献やHP検索の記載ルールを厳守すること
- ・授業を中心に春季休暇と夏季休暇のグループ別学習と個別指導により、完成させること
- ・原稿は第一草稿と第二草稿を経て最終稿を、期日に必ず提出すること
- ・いわゆるコピペによるレポートは不可であることを銘記すること
- ・無断欠席は認められないこと

表3 卒業研究のテーマ

氏名	タイトル
A	日本の食品ロスの現状
B	次世代における自動車産業：Electric Vehicle化
C	地球環境問題：種類と原因
D	未来における自動運転社会はどうか
E	日本の賃金格差と労働形態
F	今後の自動車業界に関する本の要約
G	若年者の早期離職について
H	食糧問題と肉食に関する本の要約
I	野球離れを食い止めるには
J	労働問題に関する本の要約

表3から分かるように、卒業研究として研究レポートを提出した学生とテーマに関する本の要約を提出した学生がいる。3年次のビブリオバトルから同じテーマを追い続けた学生もいれば、全く異なる分野にテーマ変更した学生もいる。ビブリオバトルと同じテーマで本を読み進めれば、知識が増えて考えも深まり良いレポートが書けるだろうと一般的には思われるが、予想に反する学生もいた。第一草稿の提出期限を3週間延長しても完成できなかった学生、期限後に参考文献を部分的にスキャンしてつなぎ合わせて提出した学生、論旨が不明な草稿を提出した学生はレポート完成が望めず、研究レポートから本の要約に課題を変更した。

4. 調査

4-1. 調査概要

本稿では、櫻井（2009）を参考にした大学生が自ら学ぶ意欲の項目とタフ（2013）を参考にした非認知能力の項目から成る質問用紙、学生が研究の進捗状況を1年間記述した「卒業研究ノート」を分析の対象とする。4年次授業の最終日2023年1月20日に出席した学生10人が教室で各自の「卒業研究ノート」を読み返し、5段階評定でチェックして振り返りを行った⁽⁸⁾。その後、無記名式の質問用紙にも5段階評定で回答した。

4-2. 結果と考察1【質問用紙】

4-2-1. 自ら学ぶ意欲

表4は平均値が4.3以上の高い項目、表5は平均値が3.2以下の低い項目である。データ量が少なく統計処理は現実的でないので、平均値と最頻値を示す⁽⁹⁾。

表4 【自ら学ぶ意欲】平均値4.3以上の項目

質 問 項 目	平均値	最頻値
興味のあることは徹底的に調べたい	4.3	5
おもしろいと思うことなら、何でも学びたい	4.6	5
知的好奇心を満足させたい	4.3	4
周囲の人から頼られるような賢い人間になりたい	4.5	5
他人の役に立つような立派な人間になりたい	4.8	5
もっと賢くなりたい	4.4	5
自分が持っている才能を十分に開花させたい	4.4	4

表5 【自ら学ぶ意欲】平均値3.2以下の項目

質 問 項 目	平均値	最頻値
いつも自分の限界に挑んでいる	2.8	2、4 ⁽¹⁰⁾
自分の知識やスキルを向上させてくれるものに挑戦している	3.2	4、(1) ⁽¹¹⁾
専門の雑誌や書物をよく読んでいる	2.3	3
自分の力を試せるような問題に挑戦している	2.8	3
学んだことを明確化するために、友達と議論する	3.0	3、4
専門が同じ学生の中では優秀なほうである	2.9	3
学習面では友達から頼られている	3.2	3
知的に優れている	3.2	3
自分には誇れる専門分野がある	3.0	3

表4の質問項目「興味のあることは徹底的に調べたい」「おもしろいと思うことなら、何でも学びたい」「知的好奇心を満足させたい」は知的好奇心、「周囲の人から頼られるような賢い人間になりたい」「他人の役に立つような立派な人間になりたい」「もっと賢くなりたい」「自分が持っている才能を十分に開花させたい」は有能さへの欲求で、いずれも欲求・動機レベルの下位尺度とされている（櫻井，2009）。

知的好奇心のうち「興味のあることは徹底的に調べたい」「おもしろいと思うことなら、何でも学びたい」は最頻値が5、有能さへの欲求のうち「周囲の人から頼られるような賢い人間になりたい」「他人の役に立つような立派な人間になりたい」「もっと賢くなりたい」も最頻値が5で、欲求・動機レベルは非常に高い。

表5の質問項目「いつも自分の限界に挑んでいる」「自分の知識やスキルを向上させてくれるものに挑戦している」「専門の雑誌や書物をよく読んでいる」「自分の力を試せるような問題に挑戦している」は積極探究、「学んだことを明確化するために、友達と議論する」は深い思考、「専門が同じ学生の中では優秀なほうである」「学習面では友達から頼られている」「知的に優れている」「自分には誇れる専門分野がある」は有能感で、積極探究と深い思考は学習行動レベルの下位尺度、有能感は認知・感情レベルの下位尺度とされている（櫻井，2009）。

「いつも自分の限界に挑んでいる」は最頻値が2と4で二極化している。同じ傾向は「自分の知識やスキルを向上させてくれるものに挑戦している」でも見られ、最頻値が4、最頻値と頻度差が1の選択肢が1で、学生間の積極探究と深い思考の差が大きい。この2項目以外は平均値・最頻値ともに3なので、一部の学生は積極探究の意欲を示しているが、大半の学生は積極探究・深い思考・有能感に対して「どちらともいえない」を選択しており判断を留保していることが分かる。つまり、学習行動レベルも認知・感情レベルも高い学生は少数派だというわけだ。

では、欲求・動機レベルで非常に高い意欲を示す学生たちが、なぜ学習行動レベルと認知・感情レベルは低いのだろうか。この疑問を非認知能力の視点から考えたい。

4-2-2. 非認知能力

表6は平均値が4.3以上の高い項目、表7は平均値が3.2以下の低い項目である。

表6 【非認知能力】平均値4.3以上の項目

質 問 項 目	平均値	最頻値
指示に従うことができる	4.6	5
公正な心を持っている	4.5	5
いつも感謝の心を忘れない	4.3	5

表6の質問項目「指示に従うことができる」はストレスに満ちた環境で育った子どもに困難なこととされているが（タフ，2013）、今回の調査結果は平均値が4.6で最頻値が5なので学生たちの生育環境は良かったと推測できる。「公正な心を持っている」「いつも感謝の心を忘れない」は、どの時代のどのような社会でも評価される24の性格の強みで、それを持っていることで実際に何が得られるので幸福で充実した人生に通じるとされている（タフ，2013）。平均値と最頻値はそれぞれ4.5と5、4.3と5なので双方とも高いと言えよう。

表7 【非認知能力】平均値3.2以下の項目

質 問 項 目	平均値	最頻値
周囲に左右されない自制心がある	2.8	3、(2)
小学生のころから学習習慣がある	2.2	1
楽観主義者だ	2.9	3
現在と将来で得られるものを比べて、満足を先延ばしにすることができる	3.0	2、(5)

表7の質問項目「周囲に左右されない自制心がある」「楽観主義者だ」「現在と将来で得られるものを比べて、満足を先延ばしにすることができる」は性格の強みに称される最も価値のあるツールとされている（タフ, 2013）。「小学生のころから学習習慣がある」が人生を成功へと導くことは、ダックワースの調査結果から結論付けられている。

表7の結果から重要なことが三つ見出せた。

一つ目は、「周囲に左右されない自制心がある」は平均値が2.8、最頻値が3、最頻値と頻度差が1の選択肢が2なので、周りの友達の影響を受けやすく自制心の脆弱な学生が多いことが客観的に示されたことである。学生をマスではなく一人ひとり観察していると、スポーツやゲームで瞬発力は日々養われているようであるが、継続して勉強できない学生が目立つ印象がある。自制心は長期的な成果に影響すると言われているので、印象が裏付けられたようである。

二つ目は「現在と将来で得られるものを比べて、満足を先延ばしにすることができる」は最頻値が2、最頻値と頻度差が1の選択肢が5で二極化傾向にあり、平均値としては中間の3.0になったのだろう。満足の先延ばしができない学生が多いという結果は、ゲームや遊びの誘惑に負けて勉強を後回しにしてプレゼンテーションや課題の準備が間に合わない学生が少なからずいた状況に一致する。

最も憂慮されるのは、「小学生のころから学習習慣がある」の平均値2.2、最頻値1で、全質問項目で最小値をマークしたことである。調査から学生の学習習慣が身につけていない実態が浮き彫りになったので、演習学生に限らず、これを拡大解釈すれば⁽¹²⁾、全学共通科目で課題が指示どおりに出せない学生や小テストの勉強をしてこない学生が毎年一定数存在する事実と反しない。

前節で欲求・動機レベルでは非常に高い意欲を示す学生たちが、どうして学習行動レベルと認知・感情レベルが低いのかと疑問を呈したが、その答えは自制心・満足の先延ばし・学習習慣が不十分、もしくは欠如している点にあるのだろう。非認知能力の中で、やり抜く力・粘り強さ・時間管理能力が注目されているが、三項目とも最頻値は「どちらともいえない」、平均値は3.2を超え低いと言えないまでも高くもなかった。つまり、自制心・満足の先延ばし・学習習慣が不十分だけでなく、やり抜く力・粘り強さ・時間管理能力も不足している。よって、知的好奇心を満足させて他人の役に立つような立派な人間になりたいという意欲は高くても、自分の力の限界に挑んだり友達と議論して深く思考したりする行動に結びつきにくく、誇れる専門分野があるとは思っていないので、学習行動レベルと認知・感情レベルで高い値を示さなかったと解釈される。

4-3. 結果と考察2【卒業研究ノート】

2023年1月20日に学生が1年間のまとめとして自らほぼ毎日記した「卒業研究ノート」を教室で読み返し、5段階評定でチェックして振り返りを行った。表8が分析結果である。質問用紙と同様に5段階チェックの平均値と最頻値を掲げる。

表8 「卒業研究ノート」の分析

振 り 返 り の 内 容	平均値	最頻値
単位取得状況・就職活動等、大切なことを卒業研究ノートに記録した	4.4	5
研究に役立つような資料（新聞HPの記事等）を卒業研究ノートに貼った	2.5	2
新しい考え・頭に浮かんだヒント等を卒業研究ノートで展開した	3.2	4
研究を進めていく中で知らない言葉があったら調べて卒業研究ノートに書きこんだ	2.7	4
卒業研究を進めるうえで、卒業研究ノートは役に立った	4.1	5

結果から明らかになったことが三つある。

一つ目は、「単位取得状況・就職活動等、大切なことを卒業研究ノートに記録した」学生が圧倒的に多数だったことで、最頻値の5から読み取れる。平均値も4.4と高い。

二つ目は、指導に従ってノートに重要事項を記録はしたものの、研究に活用するまでに至らなかった学生が少なかつたことである。「研究に役立つような資料（新聞HPの記事等）を卒業研究ノートに貼った」は平均値2.3、最頻値2である。「新しい考え・頭に浮かんだヒント等を卒業研究ノートで展開した」「研究を進めていく中で知らない言葉があったら、調べて卒業研究ノートに書きこんだ」に「全くあてはまらない」と、2人の学生が答えている。他方、「新しい考え・頭に浮かんだヒント等を卒業研究ノートで展開した」も「研究を進めていく中で知らない言葉があったら調べて卒業研究ノートに書きこんだ」も最頻値は4なので、これらの学生は新しい考え・言葉をメタ認知して研究計画を修正していたのだろう。

三つ目は「卒業研究を進めるうえで、卒業研究ノートは役に立った」と評価した学生が多数派で、平均値4.1、最頻値5であった。「全くあてはまらない」と答えた学生はおらず、「どちらともいえない」と答えた学生は自由記述で「進行具合などは頭の中で常に管理するタイプ」と自己分析している。「よくあてはまる」と答えた学生の自由記述は「本やHPで大切だと思った部分をノートに書き記した」とあり、ノート本来の使い方ができていたことが読み取れる。また、「自分のスケジュール管理に役に立った」「遊びすぎると焦ると感じた」「作業スピードが分かる」のように、進み具合をモニターにしていた学生がいたことも分かる。「やはり、ノートに記入することによって何を学んだのかわかりやすいし、ノートを見直して勉強できる」「長期的に見ると、自分が頑張ったつもりでもアルバイトや遊びが多かった為、自分の反省点を見つけることができた」「見返せるのがおもしろく、自分が1年かけて頑張ったことがわかった」と振り返りに役立っていた学生もいた。これらの記述から、総じてノートを進捗状況のバロメーターとしてメタ認知していたことが窺われる。

5. 卒業研究の進展から成績向上、人間的成長へ

2019年度入学生は、高等学校と大学の橋渡しの1年次の授業終了直後に、誰も予想しなかった新型コロナウイルスのパンデミックに遭遇した。主に抽象概念の獲得が期待される2年次に、ごく一部の少人数授業は教室で対面式で行われたが、教室の狭さという物理的な制約の下、大半の講義はリモートにならざるを得なかった。リモート授業でも双方向に発信できる形態なら学生と教員の相互コミュニケーションが一定程度は取れるが、オンデマンド主流の授業では動画視聴は学生の性善説に委ねられている。某大学で動画視聴の授業で嫌疑がかかった場合は単位認定が覆されたと報道されたが、驚くに値しない。オンデマンドは信頼性が低だけでなく、学生の勉強姿勢にも多大な影響を

及ぼした。3年次に教室で対面授業を始めたころ、着席していてもスマートフォンが手放せず、心ここにあらずの学生が数名いた。このような学生たちの2年後期終了時点の成績はGPA1.0未満、よくてもGPA1.0をわずかに超える程度であった。

ところが、1年半の演習指導を経た4年前期終了時点ではGPA1.0未満の学生はゼロになった。つまり、低空飛行していた学生の成績が上向いたのである。さらに、一部の学生を除き、ほぼ全員の4年前期終了時点のGPAが過去の値より上昇しており、学生一人ひとりが自身の成長を数字で確認し、達成感を感じ、自信を持つようになった。

これは、演習授業中に言語習得研究の一端をインプットの重要性の観点から説いたり、スマホ脳の実態と弊害について知らしめたりしたことにより、3年次後期ビブリオバトルの紹介本に垣間見えるように、学生の意識が変化していったからであろう。卒業研究の進展とともに、各科目で出された課題に前向きに取り組むようになり、提出期限も守れるようになっていった。卒業研究を進めていく過程で収穫できた想定を超える果実である。3年次に教室でスマートフォンを絶えず操作していた数人は、4年次には授業中スマートフォンを手にする姿を見せなくなったことは言うまでもない。

さらに、グループ別学習により、高校時代からの友達や入学直後に知り合った友達としか話をしなかった学生たちがグループで情報を交換したり教えあったりする場面が散見されるようになった。これはピア・ラーニングの効果であり、社会性の観点から人間的に成長した証左とも言えよう。

ただし、卒業研究指導が100%成功したわけではなく、残念ながら2年間ほとんど何も変わらなかった学生がいる。延長後の提出期限も遵守できず授業最終日も遅刻した学生、コピー&ペーストの悪習が改まらず期限後に参考文献のスクリーンショットを提出した学生である。前者は時間管理能力の面から非認知能力の低さ、後者は非認知能力のみならず認知能力（学力）の低さが根底にあるが、他の要素も無視できない。指導中、両名の言葉の端々から伝わってきた学生だから許されるのではないかという意識の在り方が自身の成長を阻む足かせになっていることは間違いないだろう。

授業最終日に行った振り返りで学生たちが記した生の声を、マズローの観点から総括する。「1年間あっという間と感じた」「頑張ってきたことを本の要約として残せたのはすごくうれしかったです」「無事に完成し、よかったと感じている」から、安堵の気持ちが伝わってくる。「人生の中で勉強が一番頑張った一年と感じます」「最高です。一年間やりきる、成長です」は充実感、「昔から作文が苦手だった自分が、卒業研究を無事に完成できるとは思っていなかったので、とても嬉しい」は満足感、「卒業研究をなし遂げて、清々しい気持ちになった」「清々しい気持ちです」は達成感を覚えているので、マズローの自尊心の欲求が充足された段階にあるだろう。「問題意識が高まった気がする。研究で学んだことをいかして少しでも問題解決の役に立てれば良いなと思った」からは、ヒエラルキーの頂上の自己実現に向かって歩みだそうとする兆しを感じられる。

6. おわりに

専門演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの内容、最終授業日に行ったアンケート、及び1年間の研究過程を記した「卒業研究ノート」を分析した結果、次の4点が明らかになった。第一は、卒業研究を通してGPAの過去最高値マークから看取されるように、学生たちの認知能力（学力）が向上したことである。第二は、自制心・やり抜く力・満足の先延ばし・時間管理能力・学習習慣等の非認知能力が低い学生は、賢く立派な人間になりたいという欲求・動機レベルは高くても、自分の力の限界に挑んだり友達と議論したりする行動に結びつきにくく、誇れる専門分野があるとは思えず、学

習行動レベルと認知・感情レベルで高い傾向を示さなかったことである。第三は、ほとんどの学生は研究の進み具合を「卒業研究ノート」でモニターして、研究が完成するように振り返りに役立てていたことである。第四は、卒業研究をやり抜いた暁に、学生たちはマズローの成長欲求の段階が高次のレベルに至ったことを心の内から湧き出す感情により自覚したことである。

今後の課題としては、本稿の調査と同時期に大学生が自ら学ぶ意欲と非認知能力の項目から構成される同様のアンケートを1年次対象の全学共通科目受講者にも実施したので、本稿の分析結果と比較し、下級生に見られる特徴、及び上級生と下級生とで傾向に違いがあるようなら、その相違点も含めて考察を進め、指導に活かしていきたい。

注

- (1) 4年次前期授業開始時点で2018年度入学生の数人は、これまでに書店に行ったことがないと読書経験について述べた。
- (2) 2000年にヘックマンはノーベル経済学賞を受賞している。就学前プログラムを受けた子どもと受けなかった子どもの成長後の生活状況を比較し、プログラムを受けた子どものほうが年収や学歴が高く犯罪率が低いことを見出した。ヘックマンは、この差異を生んだ要因をIQの高さではなく、プログラムで獲得した数値化しにくい力(=非認知能力)と考えた(中山, 2018)。
- (3) 賢さとは学校の中での知能・学力を意味している。
- (4) COVID-19が蔓延し緊急事態宣言が発出された時期に該当したので、学内施設(学術情報センター)で学生が密状態になる側面にも配慮した。
- (5) 「ビブリオバトル」は本の紹介を前期・後期で各2冊行ったが、期末レポートの課題は2冊のうち1冊についてまとめることであったので、レポート報告しなかったほうの本の詳細は時間が経つにつれ発表者自身も定かでなくなった。
- (6) 3年次夏期休暇明けに「休み中に何をしたか。どのような経験をしたか。新しい発見はあったか」と尋ねたところ、新型コロナウイルス感染症に罹患した一人の学生が家族の病状について語ったことを除いて、他の学生は「バイトとゲーム」と異口同音に答えた。行動制限があった期間なので活動範囲が狭くなるのはやむを得ないが、水を含ませたら大きく膨らむスポンジのように心も頭も柔らかい時期に、ルーチンワークのようにバイトとゲームで時間を過ごすことしか思いつかない学生たちの発想の貧困さに驚愕した。春期休暇に大学生らしく自ら抱く研究テーマに没頭する姿勢は期待できそうにないので、授業期間の勉強モードを保持したまま卒業研究に着手させるため、日本語補習とグループ別指導を前期授業の前倒し補習として実施した。
- (7) グループ別に協働学習でチェック表を使って項目別に相互チェックを行わせた。
- (8) 選択肢は1、2、3、4、5とし、この順序で1点、2点、3点、4点、5点と数量化した。選択肢1は「全くあてはまらない」、3は「どちらともいえない」、5は「よくあてはまる」と表現した。
- (9) 最頻値を加味するのは、外れ値が平均値に与える影響を考慮したからである。
- (10) 頻度が同数の場合、選択肢の番号を2つ載せた。
- (11) 最頻値と頻度差が1の選択肢をカッコ書きで表した。
- (12) 本稿の主旨は卒業研究の教育的効果を考察することなので、分析対象は専門演習の履修生である。同様の調査を全学共通科目の履修生にも行ったので、詳細は別稿に譲る。

参考文献

- 伊藤恵美子(2017)「アカデミック・ライティングに向けて:ビブリオバトル導入の試み」『東邦学誌』第46巻第1号81-96.
- OECD教育研究革新センター(2015)篠原真子・篠原康正・巽岩晶(訳)『メタ認知の教育学:生きる力を育む創造的数学力』明石書店(OECD 2014 *Critical Maths for Innovative Societies: The Role of Metacognitive Pedagogies*. Paris: OECD Publishing)

- 小塩真司（2021）『非認知能力：概念・測定と教育の可能性』北大路書房
- 笠井千歳・長友隆志（2018）「学習ジャーナルによる英語授業の振り返りの検証：自己効力感・メタ認知の観点から」『岐阜大学地域科学部研究報告』第43巻13-28.
- ゴープル F. (1972) 小口忠彦（訳）『マズローの心理学』産業能率短期大学出版部（Goble F. 1970 *The Third Force: The Psychology of Abraham Maslow*. New York: Pocket Books）
- 櫻井茂男（2009）『自ら学ぶ意欲の心理学：キャリア発達の視点を加えて』有斐閣
- タフ P. (2013) 高山真由美（訳）『成功する子 失敗する子：何が「その後の人生」を決めるのか』英治出版（Tough, Paul 2012 *How Children Succeed: Grit, Curiosity, and The Hidden Power of Character*. Boston, MA: Houghton Mifflin Harcourt）
- 藤田裕子・福島智子・白頭宏美（2022）「メタ認知の活用を促す読解授業における振り返り活動：振り返りシートの分析からの提案」『2022年度日本語教育学会秋季大会予稿集』216-221.
- 中山芳一（2018）『学力では測れない非認知能力が子どもを伸ばす』東京書籍
- 吉田茂樹（2012）『対話による文章表現指導の研究：〈個に即した支援〉の理論と方法』溪水社
- 渡邊久暢（2012）「高校国語科表論文における読解方略指導のあり方：学習者による『ふりかえり』に焦点をあてて」『福井大学教育実践研究』第36巻 1-12.
- 全国大学生生活協同組合連合会（全国大学生協連）（2022）「第57回学生生活実態調査 概要報告」<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>（2023年2月26日閲覧）